

# 儀礼と儀礼空間に関する研究

## ー ラオスのN村を事例として ー

### Keywords

住居 儀礼 儀礼空間  
幸福 豊かさ 高齢者



K09024 柄澤 匡亮

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景

日本人の暮らしとは真逆と言っても過言ではない生活をしているラオスの人々の幸福について、私は興味を持った。彼らは自給自足の暮らしをし、宗教を大事にしているが、そこに幸福を感じているのかが気になったためである。

また、ラオスの人々の暮らしを考えるにあたって、その基層文化となっているのが宗教であることが知られている。したがって、ラオスの宗教・信仰を調べていけば、私の知りたい幸福についての答えが見つかるのではないかと考えた。

### 1.2 研究目的

本研究では、国内の社会、経済状況が著しく変化を遂げつつあるラオス人民民主共和国（以下ラオス）で調査を行う。

ラオスでは、国民の約7割が信仰している仏教の他に、精霊祭祀やバーシーといった土着の習慣が存在している。バーシーは、ラオス人の生活には切っても切れない宗教上の大切な習慣・儀式である。新年、出生、結婚、死別等人生の節目や、歓迎、送別、快気、厄払い等人の動きに応じて賑々しく実施される。娯楽の少ない日常生活において、村人にとっては数少ない楽しみのおきでもあるようだ。

これらを踏まえた上で、本研究では、ラオス国内の一農村における儀礼空間に焦点を絞る。儀礼空間は、宗教の習慣・儀式において重要だからである。本研究では、このような観点から、儀礼空間と風俗習慣の実態を明らかにし、それをラオスの人々の幸福にからめて位置づけることを目的とする。

### 1.3 研究方法

2012年8月18日～9月1日の14日間、ラオスのN村で現地調査を行った。調査内容は、各住居の実測と集落全体の実測、各世帯および村長・僧侶へのインタビュー調査である。

#### (1) 実測

平面図(1/50)、屋敷図(1/200)、集落図(1/500)をそれぞれ実測により作製し、40軒のデータが得られた。

## (2) インタビュー調査

職業や年齢などの基本情報や、儀式の内容、祭壇、柱の意味などについてインタビューを行い、42軒のデータが得られた。

## 2. 調査地の概要

### 2.1 N村の概要

ラオスの面積は、日本の本州とほぼ同じ約23.7万平方kmで、人口は632万人である。国連開発計画によれば、人口の80%が農山村部に居住し、労働人口の80%以上が農林業に従事している(平成24年9月現在)。

今回調査地としたN村は、ラオスのルアンパバーンから200kmほど離れており、車で約3時間の場所に位置している。

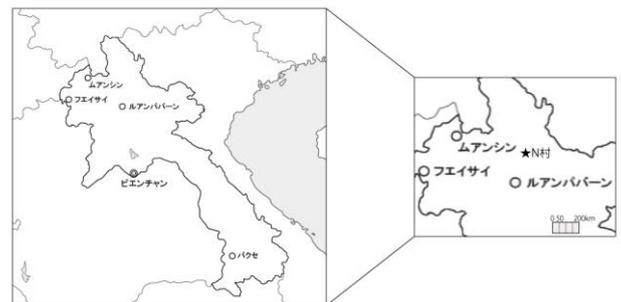


図1 調査対象地

世帯数104、学校1、寺院1で人口は504人の村である。電気はほぼすべての住宅で使用されていたが、ガスと水道はなく、水は山水をひき、生活用水として使用していた。便所や水浴び場は母屋とは別に、分けて外に作られている住宅がほとんどであった。

### 2.2 住居

住居形式においては、高床式と地床式が見られた。全住居数104軒のうち、68軒の住居が高床式で、2階部分は竹の網代壁か板壁で覆われている。1階部分は柱だけで囲いがなく、機織り1台、藍壺3～4つ、漁具、鳥籠などが置かれていた。地床式においては、コンクリートで建てられた平屋が多く、12軒あった。また、高床式の床下部分の壁をコンクリートで作り、1階も居住空間にした2階建ての住居が24軒存在した。

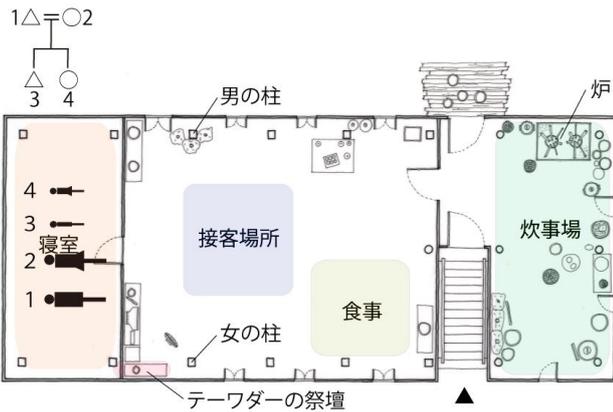


図2 高床式住居における一般的使用方法

### 2.3 宗教

ラオスには多数の民族がいるため、国全体で共通する宗教というよりは、その民族や土地固有の宗教がある。複数の集団で同じ名称で呼ばれる宗教があっても、宗教の内容は違うこともある。宗教とその信徒数は、66.8%の上座部仏教、キリスト教徒1.5%、バハイ教徒とイスラム教徒が1%未満、その他30.9%、不明0.7%である。

## 3. 集落と住居の特徴：宗教実践に着目して

### 3.1 集落における宗教実践

#### (1) 寺院

インタビュー調査を行った42軒全てが小乗仏教徒であることから、N村では仏教徒が大多数を占めていることが分かる。寺院は仏教における宗教施設であるが、村人の中には、一番大事なものは寺院であると答えた者もあり、村落社会にとっては重要なものであることが分かる。

#### (2) カン・チャイ・バーン(カン：中心、チャイ：心、バーン：村)

N村の中心地には、「村の心」という意味が込められている石の柱(Kaan Cai Baan)が、埋められている(図3の★)。この村に住む人々をはじめ、タイ系の諸集国のあいだでは、村を建設するとき、最初に中心を定め、そこを中心として村の領域を決めていくという慣習がある。



図3 カン・チャイ・バーン

### 3.2 住居における宗教実践

#### (1) 祖霊

祖霊とは、家族や血縁集団の守護神的な属性を持つ先祖とみなされる靈魂のことである。N村では、人は死後、生者の世界のすぐ近くにおいて、お盆や正月に子孫の元に帰ってくると考えられている。

#### (2) テーワダー

テーワダーとは、仏教の言葉で民族や先祖といった意味であり、超自然的存在として信仰されている。人が亡くなった際、その魂は、生前に善行を成していたか、悪行を成していたかによって大きく悪霊と善霊に分かれるとされている。

### 4. 儀礼

次に、村落で行われる宗教実践について述べる。村人への聞き取りから、以下の諸儀礼は、村落生活に欠かせない、最も重要な儀礼である。

#### 4.1 Son Khorの儀礼(Son:送る、Khor:悪いこと)

この儀礼は5種類あり、すべて住居内で行う。

##### (1) Son Khor Peu Dio (Peu Dio: 1人)

村人が村から出て、悪いことに出会ってしまった時に、その当人に対して行う儀礼。

##### (2) Son Khor Heuan (Heuan: 住居)

家族内で病気になる人間が多い、家族が元気がないという時に、家族全員に対して行う儀礼。

##### (3) Son Khor Tan Khao (Tan Khao: 箒で掃く)

住居を建てる材木で、傷んでいる木、倒れそうに斜めに育っている木、水辺に生えていて水に反射している木、水牛がよくいる水辺に生えている木、木を切っている時に屁のような音が出る木、木の中に入っている水が尿のように出てくる木、これらに該当する木を使って、住居を造ってはならない。しかし、家族の病気が多い時などに、これらの木が使われているのではないかということで、住居内の該当する柱を少しずつ削り取って行う儀礼。

##### (4) Son Khor Ubaa (Ubaa: 悪いこと)

自分が怪我をしているわけでも、誰かが食用の動物を殺したわけでもないのに、森や村で血を見た時、フクロウや蛇が住居内に入ってきた時、鳥やリスなどの、普段近づくと逃げる動物が逃げない時。これらは異常なことであり、このことが起こったあと3日以内に、家族や住居に悪いことが起こるとされている。その際に行う儀礼。

##### (5) Son Khor To Pun (To Pun: 12支の動物)

もし病気になった時、その年の干支が12支の中の「大きな動物」とであると良くないとされている。タイラーの12支は、象・獅子・虎・猫・山羊・猿・牛・水牛・アヒル・鶏・豚・犬である。この中の象・獅子・虎・牛・水牛が、それに当たる。

## 4.2 Sut Heuanの儀礼(Sut:お唱え、Heuan:家)

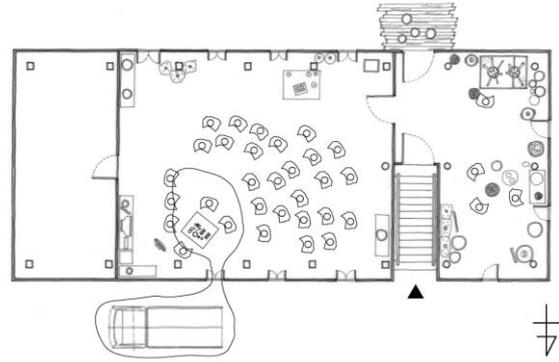
### 4.2.1 儀礼の過程

Sut Heuanの儀礼は、住居の屋根を張り替えた時や柱を替えた時などに行うもので、基本的に住居に関わる儀礼である。また、車を購入した時や車の塗装を変えた時などにも行われる。

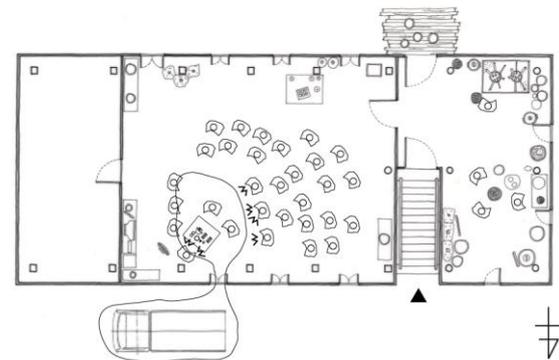
この儀礼は、実際に観察することができたので、以下に儀礼の一連の流れを空間的に記述する。

この儀礼が行われたのは、8月26日18時32分からである。儀礼がおこなわれた理由は、住居内のある柱から、夜中に奇妙な音が聞こえたこと、また、クライアントとなる家族は、数年前に車を購入したが、その際にSut Heuanをしておらず、最近、塗装しなおしたので、それを機に、Sut Heuanをすることになった。

以下に、儀礼の過程を記述する。

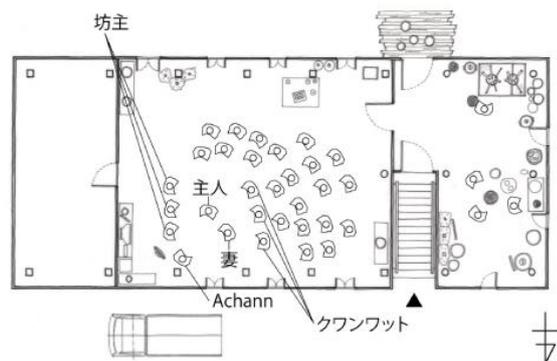


18 : 42 Achannは悪い精霊が入ってこないようにFai Mu Kan (白い糸) で、主人、妻、Achann、供え物、車を囲い、結界を作る。

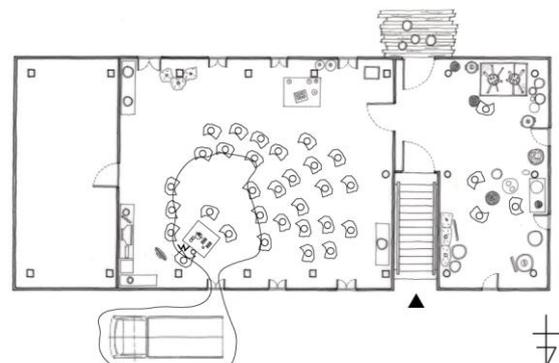


18 : 47 Achann、クワンワット (寺の管理をし、儀礼を行う際には儀礼を手伝うことができる者) が口誦を繰り返す。

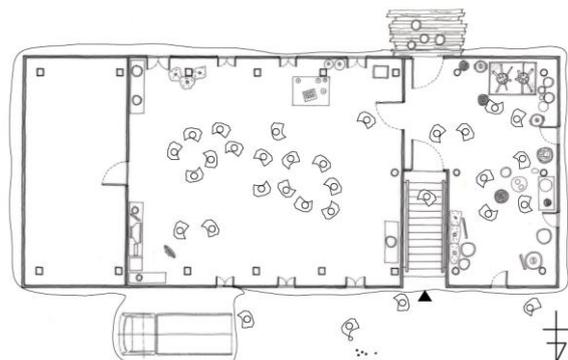
18 : 32 人々は、住居内や屋外など思い思いの場所にいる。炊事場では、儀礼後の宴会用の食事を準備している者もいる。



18 : 38 Achann (村の寺院に暮らす僧であり、儀礼を行う祭司) と、その弟子である坊主3人が住居内に入る。Achannは住居の北側、夜中に音がしたとされる柱の横に、南に顔を向けて座り、坊主たちも座る。クライアントであるこの住居の主人とその妻がAchannの前に座り、それを囲うようにして、クライアントの親戚や近隣住民が座る。



19 : 17 Achannが口誦をしながら、Bai Naa (柑橘系の果実の葉) に聖水をつけ、家族に振りかける。



19:35 儀礼が終了となり、皆が雑談をし、宴会の準備を始める。主人が、Achannの言葉の力が入った砂利を住居の周りに撒く。Achannは、白い紙にパーリ語で祈りの言葉を書き込む。この紙を、音が鳴った柱にくくりつける。また、白い糸を住居と車に巻きつける。

#### 4.2.2 儀礼の考察

以下に、この儀礼でみられる要点とその意味を考察する。

この儀礼では、白い糸をクライアントや住居、車に巻きつけて結界を張る、聖水を振りかける、パーリ語の呪文、言葉の力が込められた砂を撒くなど、住居から悪いものを排除するための行為が多くみられる。また、村の寺院に暮らす僧であるAchannが、儀礼の祭司を務める。これらを通して、この儀礼は、この家族に「安心」をもたらしたのだと考えられる。

#### 4.3 Wang Sing

N村で信仰されている小乗仏教では、人間には5戒律ある。1、Baa Maa:人、動物を殺さない。2、Aa Tinaa:人のモノを泥棒しない。3、Ka Mii:浮気をしてはいけない。4、Mu Sa Waa:嘘をついてはいけない。5、Su Rami:酒を飲んではいけない。この5戒律を、もちろん毎日でも良いのだが、満月、半月、新月の、月に4回あるワンシンの日には必ず守らなければならない。

#### 4.4 Basii Suu Khuan

人間の体には32の精霊が宿っており、これが体内にあるときは幸せに過ごすことができるが、体外に出てしまうと不幸なことが起こる。精霊が体外に出るのは新年、子供の誕生、結婚、親族・友人などの送別および歓迎、住居の新築、さらに病気・傷害が治癒した時などである。こうした機会に、親族をはじめ友人、近所の人々などが集まって、精霊が身体の外に出ないように、そして出てしまった精霊を呼び戻すために、パーシーが行われる。幸福と繁栄を祈願するパムに基づく儀礼である。



写真1 パーシーの様子

## 5. 考察

N村では村全体に電気が通っており、近年は、たくさんの電化製品が流入している。主な電化製品としては、冷蔵庫、テレビ、DVDプレイヤー、スピーカーなどである。外部からこのような物質文化が流入し、住まい方にも変化が訪れたといえる。しかし、私たちが暮らしている日本の生活とは、物の量については比べようがないほどの差がある。住まい方に変化が訪れてはいるが、物質的には決して満足とはいえないだろう。

一方で、儀礼を行うことや寺院に行くというような、信仰に関わる行為は現在も続けられている。

さまざまな儀礼があるが、それらの儀礼に共通して、儀礼に参加する人たちがいる。それは、村の高齢者である。儀礼を行う上で、祭司は必要な存在であり、重要な役割を担う。祭司を務められる者は、多くの儀礼に携わり、村や儀礼の歴史を知っている者でなくてはならない。高齢者は、儀礼の経験が豊富であり、祭司を務めることが多い。日本では、高齢者は力仕事などができなくなったり、周囲の高齢者も亡くなり、孤独化が進んでいくのが現状である。しかし、N村においてはその逆で、儀礼を行うことができる高齢者が必要とされている。また、高齢者自身も孤独を感じる事がなく、自分の存在意義を儀礼の場で確認することができる。そしてまた、このことは、高齢者に限らず、どの村人にも当てはまる。

儀礼を行うことは、直接的には村人の幸せとはつながってはいないかもしれない。しかし、儀礼を行うことにより、物質的には乏しいが、村人の心は豊かになっていると、私は考える。

## 6. おわりに

今回の論文では、N村の儀礼について述べてきた。これは、私が短期間N村の人々と同じ時間を過ごし、調査してきたことにより、分かったことである。実際には、私が知ることができた儀礼や習慣以外にも、さまざまな儀礼や慣習があるのだと考えられる。それは、村の人でないと分かり得ないことなのかもしれないし、もしかしたら身体化されており、村の人でさえ認識していないかもしれない。それらの奥深く、容易には理解できないことを、フィールドワークを通して、少しでも知ることができたことを光栄に感じる。

### 参考文献

- 1) ラオス文化研究所『ラオス概説』めこん 2003
- 2) ラオス文化研究所『ラオスの開発と国際協力』めこん 2003
- 3) 地球の歩き方編集室『ラオス (2011~2012年版) 地球の歩き方』ダイヤモンド・ビッグ社 2011
- 4) 桃木至朗ほか『東南アジアを知る事典』平凡社 2008
- 5) 佐々木宏幹『宗教人類学』新曜社 2002
- 6) 林行夫『ラオ人社会の宗教と文化変容 東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会 2000